
誠実で純粹無垢なミミ

2024 年度全国共同制作オペラは、今年没後 100 年を迎えているプッチーニの『ラ・ボエーム』を、東京・名取・京都・兵庫・熊本・金沢・川崎の 7ヶ所で上演する。前半に当たる東京・名取・京都公演でミミを演じるのが、アルメニア出身のソプラノ、ルザン・マンタシャンだ。今年 1 月にはミミ役で英国ロイヤルオペラにデビュー、また 3 月には『エフゲニー・オネーギン』のタチヤーナ役でウィーン国立歌劇場にもデビューを果たした、今世界が注目する若きディーヴァである。リハーサルを見学したが、マンタシャンのミミは実にピュアで誠実な印象で、「恋する女性」の美しさに満ちていた。

「しばしばミミは下心を持ってロドルフォに近づいたという解釈がなされることがありますが、今回の森山開次さんの演出はそうではありません。ミミは誠実で正直で、自分を繕うということがない純粹無垢な女性。確かに、現代ではなかなかいないような女性ですが、ミミのそうした心はみなさんにも共感を持っていただけるのではないのでしょうか。そのためにも、表現が甘くなりすぎないように心がけています」

マンタシャン自身は、ミミを「シンプル、かつ深みのある人物」だと考えているようだ。

「第 1 幕のアリア『私の名はミミ』には、ミミらしさがよく表れています。彼女はささいな物事に気づき、そこから感銘を受けることができる人です。それは、どんなものにも魂が宿っていて、それらを大切にするという日本人の心にも通じるものがあると私は感じています。そして、“雪解けの季節がやってきた時の最初の太陽は私のもの”というミミは詩人でもある。ロドルフォとは同じ魂を持っていて、同じ景色を見ているんです。だからこそふたりは出会ってすぐに恋におちたのだと思います」



すべての人と「共に創り上げる」

『ラ・ボエーム』= ボヘミアンたち、というタイトルの通り、この作品は若い男女の恋と生き様を描いているが、今回マンタシャン組の共演者たちは皆同世代ということで、舞台上からも「若さ」があふれ出てくるようだ。

「第1幕では4人の男性、というよりも男の子たちがじゃれあっているシーンから始まりますが、そのうちのひとりが恋に落ち、カップルになり、やがて別れがやってきて死を経験する。つまりこの作品は人生そのものなのです。実は私は12年前にムゼッタを演じているのですが、その時も感じた共演者たちと“共に創り上げる”という感覚を、今回も味わっています。そんな私たちを導いてくれるのが井上道義マエストロと演出の森山開次さんで、やはりお二人からも“共に作品を創り上げている”という印象を強く受けます。中でも井上マエストロは音楽の素晴らしさだけ



ではなく作品の全体像、さらには観客の皆さんの気持ちも受け止めて、それらを私たちに伝えてくれますし、またディスカッションの機会も設けてくれます。マエストロが作品全体に手をかけているというのは、ヨーロッパでも最近はなかなかないこと。井上マエストロの引退を日本中のクラシック・ファンが惜んでいるのも無理のないことだと感じました。本当に稀有なマエストロです」

歌手になるきっかけと今後

幼い頃からピアノを習っていて、プロのピアニストになりたかったというマンタシャン。彼女の歌手人生は、ピアニストへの夢を諦めたことから始まった。

「7歳ぐらいまで本気でプロのピアニストを目指していたのですが、なるからには世界のトップレベルになりたいという思いがあって、果たして私はピアニストとしてそこまでいけるかと考えた時に、それは無理なのではないかと思うようになりました。一方、小さい頃から絶対音感があって音楽的な耳を持っているということはわかっていましたので、それを活かして当時好きだったポップスの歌手になろうと思ったんです。12歳の頃です。母にそのことを話すとかなりびっくりされましたが、それならばまずはクラシックの声楽を勉強してみたらどう、と勧められました。私の家族には音楽家はいなかったのですが、一人だけ、叔母が音楽院で声楽家の伴奏ピアニストを務めており、その声楽家の先生に習うことになりました。当時、90年代のアルメニアはとても貧しくて、プロのオペラ歌手を目指すというようなことはあまり考えられなかったのですが、家族のサポートもあり、歌がとても好きになって今に至ります」

そんなマンタシャンがいつか歌いたいのは「『ドン・カルロ』のエリザベッタと、そして『蝶々夫人』」だそう。

「このふたつの役は将来の夢、ですが、来年の春にジュネーヴ歌劇場で『椿姫』のヴィオレッタのロール・デビューをすることが決まっています。長い間、ヴィオレッタという役は自分には難しすぎるので他のソプラノに譲ろう、と折り合

いをつけてきました。でも今回オファーが来て恐る恐る歌ってみたら“できるのではないか”と初めて思えたんです。もちろん今でも怖いし、緊張でいっぱいですが」

インタビュー中もずっと考え深く、言葉を選んで答えてくれたマンタシャンは、まさにミミのように純粹で誠実な人だ



と感じたし、だからこそ彼女のミミが心を打つのだと思う。最後に日本の観客へのメッセージをもらった。

「オペラとはこういうものだ、という先入観を持たず、ぜひオープンな心で観にきてください。このオペラは感情を揺さぶるパワフルな作品なので、必ず日常生活から離れた素晴らしい感動を味わえると思います」

取材・文 室田尚子